神奈川県立こども医療センター（KCMC）

小児がんセンターたより

小児病院の良いところ、悪いところ（前編）

神奈川県立こども医療センターは 1970 年に開設された、日本で最も古くからある小児病院の 1 つです。小児医療に関するあらゆる機能を備えた病院として、開設から 50 年以上の歴史を刻んできました。

さて、それでは小児病院には欠点はないのでしょうか？　残念ながらいくつか挙げることができます。まず、こども時代に治療をして大人になった患者さんを、ずっと診療し続けることが難しいこと。これは、大人のからだを診ることができるスタッフがいないことが原因です。私で言えば、肝芽腫には詳しいけど大人の胃がんの診療経験は少ないです。循環器であれば、先天性心疾患の専門家は揃っていますが、心筋梗塞の専門家はいません。つまり、成人になっても診療し続けなくてはならない場合、成人の病院に紹介して病院を移ること、つまり成人移行が必要になります。大学病院などですと、院内でその橋渡しができてしまいます。開設当初は問題にならなかったことですが、特に小児がん領域では長期フォローアップの重要性が認識されてきたこともあり、この問題が重要になってきています。

第二に、特に外科では臓器に特化した特殊な専門家がいないこと。成人では、来る日も来る日も甲状腺の手術をしている医師、年に 100 回以上胃を摘出している医師、白内障の手術だけで開業している医師、などその臓器一筋、のプロがたくさんいます。我々小児外科医は頸部、胸、おなかなどいろいろな部位の病気の手術をしますが、成人と違って「私は胃が専門」という医師はいません。ですので、たまに難しい症例で成人診療科の医師に応援を頼むことがあります。例えば高度な技術を要する内視鏡などがそうです。もちろん私は「小児がんが専門」であり、これは成人診療科の医師はさっぱりわからない分野です。（後編に続く）

小児がんセンター長　北河 徳彦

在宅ケア研修会・小児がん相談支援室セミナーを開催しました

2020 年度は実施できなかった各種セミナーですが、2021 年度はオンラインにて開催し、多くの方々に参加していただくことができました。

３月１日に開催した「小児がん在宅ケア研修会」では、県内の在宅クリニックや訪問看護ステーションなどを対象に、「小児がん在宅医療の連携について」をテーマに開催しました。事例を基に、在宅診療医、看護師の立場から、また当院の医師、相談員の立場からそれぞれの連携についてお話しし、活発な意見交換がなされました。

また、３月 18 日に横浜市との共催で開催した「小児がん相談支援室セミナー」では、「小児がんの移行期医療」をテーマに、小児がんの経験者が大人になり小児科や小児病院を卒業するまでとその後の医療と支援について、医師や相談員から話題を提供し、病院や地域の支援者だけでなく小児がん経験者やご家族も参加され、「知らなかったことを知ることができた」「今後もこのような機会を作ってほしい」などご意見もいただきました。

今後もオンラインなどを活用しながら、できるだけ関心を持っていただけるようなセミナーを企画していきたいと思っています。

「小児がんセンターより研修会などのお知らせ」

●2022 年度神奈川県小児がん従事者研修

７月 14 日（火）小児がんとゲノム医療

小児・AYA がん患者の妊孕性について

９月 20 日（火）骨・軟部腫瘍

18：00～19：00
Web 参加可能

（詳しくは、各施設に配布の案内・当院 HP をご確認ください）

国際小児がんデー特設 web サイトを開催しました！！

コロナウィルスの影響により、例年開催していた２月 15 日の国際小児がんデーの会場でのイベントは今年も断念いたしました。それでも、どうにかして小児がんのことを世の中の方々に知ってもらいたい！その思いが一つになり、期間限定で「特設 web サイト」を開設しました。こども医療センターのスタッフはじめ、多くの応援団が賛同してくださり、小児がんのこどもの生活や成長を描いた「すごろく」や各応援団の活動紹介、ブラスバンドのオンライン合奏、ダンス投稿企画など盛りだくさんな内容となり、視聴回数は 2500 回以上となりました。また視聴者からの応援メッセージも寄せられ、小児がんの経験者やご家族だけでなく、一般市民の方々にも届いていることがわかりました。SNS などを通じて知った方もおられ、皆様に感謝の思いと、「コロナ禍でも啓発活動はできる！」ことを実感しています。

今後も社会情勢の変化は予測がつかないことも起きる可能性があり、我々はどの様な状況下であっても、小児がんのお子さんやご家族、経験者の方々が社会の中でよりよく生活できるように、試行錯誤しながら啓発活動や支援を続けていきたいと思っています。

視聴者からの
応援メッセージです
（詳しくはHP にて）

- 見える応援も　見えない応援も　いっぱいいっぱい広がっていますよ♪
- お子さん・ご家族とも、もう十分頑張っているので、周りを頼って、弱音をはいて、毎日を楽しめるように過ごせることをお祈りしています
- 健康な方々には献血の呼びかけも頑張ります
- 一人でも多くのこどもの命が救われ、幸せな生活が送られますよう祈ります
- 病気のこどもたちの応援団がたくさんいることを知ることができてよかったです。応援団同士で協力し、その輪を広げて世の中全体で支えていけたらいいなと思います

小児がんに関連したご相談は
「小児がん相談支援室」（本館１階７番窓口）までご連絡ください
時間：平日（月～金）８：30～17：15
相談方法：面談・電話・メール
電話:045-711-2351（代）　E-mail:shounigan@kcmc.jp

各部門からのお知らせ

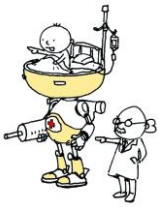
～（病理診断科）～

はじめまして。病理診断科の田中です。

病理診断科は直接患者様、ご家族様にお会いする機会が少なく、あまり馴染みのない診療科かと思います。何年か前に「フラジャイル」というドラマで長瀬智也さんが主役の病理診断医を演じていましたが、ご記憶にある方はおられますでしょうか？

体のどこかにしこりができたとき、「詳しい検査をしましょう」と手術や、針を使った生検術で腫瘍全体や一部を採取することがあります。採取された組織から、「腫瘍です」「良性です」「悪性です」という判断や、腫瘍の種類や悪性度の評価など、治療に必要な病気の情報を調べるのが病理診断医です。治療後にどれくらい効果があったかなども確認します。主に顕微鏡を使って観察しますが、特殊な染色をして腫瘍の性格を確認したり、腫瘍の DNA を取り出して遺伝子の異常を調べたりすることもあります。特にこどもにできる腫瘍には非常に稀で診断が難しいものがあります。最近はそのような腫瘍では、たくさんの遺伝子異常を一度に調べられる次世代シーケンサーといった機械を使った検査も取り入れて、少しでも診療に役立つ情報を、実際に治療を担当されている先生方にお伝えできるよう取り組んでいます。

前述のドラマの病理診断医の決め台詞は「君たちが医者であるかぎり、僕の言葉は絶対だ！」でした。こんな強気の発言はちょっとできませんが、小児がん診療で最終診断を担っている責任感を持って、真摯に日々の診療に取り組んでまいります。



病理診断科　田中　水緒